# 燎原

京都市左京区東竹屋町川端東入る
社団法人「部落問題研究所」内
発行所　燎原社
電話京都（七六一）二一四一番
振替京都一五七六二番
発行人　木村京太郎
頒価　一部一〇〇円（送料別）
年額（十二回）送料共二、〇〇〇円


## 十二月八日を迎えて思うこと

三九年目の開戦記念日、十二月八日を迎えて思うことは、私たちをあの破滅の道に追いこんだ戦犯政治が今日も生き残り、さらに拡大されつつある、ということである。

徴兵制と海外派兵のための憲法改悪の公然たる論議、靖国神社へのほとんど全閣僚の参拝と国営化法案の検討など、また十一月二十二日の新聞は、電子工業会長の兵器輸出の解禁要求の発言を一斉に報じている。なお、地方議会には、自民党や右翼団体によって、機密保護法や、有事立法制定促進の決議案などが、各地で提出され、上・下相呼応しての世論化工作が活発に行われている。まさに、自民党や財界、右翼団体や防衛当局によって、明白に憲法違反、軍国主義復活の主張や宣伝が、誰はばからずおしだされているのである。

もちろん、戦後は戦前とちがい、強力な平和民主勢力が成長している。私たちはその力で今日まで、さまざまな攻撃をはねかえしながら、平和と民主主義の憲法を守りつづけてきた。しかしその間にも日本の反動勢力はアメリカ帝国主義の圧力の下に、憲法の空洞化や、日米安保条約の拡大解釈により日本の軍国主義復活を一歩づつ進めてきている。

さらに危険なことは、さいきんの労働戦線や一部野党の右傾化が、この勢いに拍車をかけていることである。

先日の毎日新聞「編集者への手紙」欄に「平和のために軍備が必要」という投稿が載っていた。筆者は熊本県の三四才になる高校教師、敗戦で父母が中国から引揚げる途中で生れ、辛労で乳の出ない母親におもゆで育てられ、ヒドイたけのこ生活の中で成長し、今三人の子の父となる。「今の豊かな生活の中でさえ大変な子育てである。当時の父母の苦労を考えると、私は筆舌に尽し難い感慨を覚える。もう二度とこのような思いを国民に味わわせてはならない」。だからこそ「軍備が必要だ」と云うのである。

今年の八月十五日を前後して、沢山の戦時下の苦労話が語られた。これは確かに軍国主義阻止の大切な一環であるが、それだけならこの高校教師の主張も可能となる。この投稿では、戦争がどこから起って、日本国民を塗炭（とたん）の苦しみにまきこんだことになって、肝心の戦争を誰が起したのか、今軍備拡張の必要を説いている勢力は、これとどんな関係にあるのか、がまるっきり欠落しているのである。

私は戦後の戦争犯罪人の追求が、日本人の手によって、西ドイツやフランスのように徹底的に行われなかったことが、今日の日本に大きな不幸をもたらしていると考えている。日本の軍国主義を推進し、アジアの諸国民に償うことのできない被害をおしつけ、日本国民を破滅のみちに叩きこんだあの戦犯政治は、今日もなお生きのび、アメリカの圧力も加っていっそう羽を伸ばそうとしている。

かつて宮本顕治氏の「スパイ査問事情」を不法に取上げた国会での、不破哲三氏の追求に対し、時の三木首相がどうしても、過去の戦争を侵略戦争と認めなかったことも、この戦犯政治温存の立派な証明である。

○

日本の戦争は、昭和十六年十二月八日から始ったのではない。軍事的には昭和六年九月の満州侵略、昭和十二年七月日中全面戦争、十五年九月のインドシナ半島「進駐」、その当然の結論として十六年十二月八日の太平洋戦争なのである。さらに政治的には、国民精神総動員運動と国家総動員法、既成政党や労働組合の解散と大政翼賛会、産業報国会の結成で軍国主義体制を確立した。そのときはもはや戦争反対・民主主義擁護のいかなる行動も、言論もいっさい封殺された中での太平洋戦争の開始であった。この破滅の道が温存された戦犯政治の手によって再びくり返されようとしている。

体制が確立されてからではもうおそい。その一つひとつの芽生えを平和・民主勢力の総力をあげて潰すことが大事なのである。

私たちはこの日本が悲惨な戦争にめりこんでいった時代を、つぶさに身をもって体験してきた世代である。この私たちの事実と体験にもとづく証言こそ、かつての戦犯政治の実体を暴露しいまなお温存されている戦犯政治を摘発する、かけがえのない責務である。

現在さまざまな世論調査の中で、若者たちのマイホーム主義・政治的無関心が大きく拡がっている事実が指摘されている。しかし、軍事ファシズムは終局的にはマイホーム主義の最後のひとかけらさえも破壊しつくすことを、誰よりもよく知っているのは私たちである。忌わしい十二月八日の太平洋戦争開戦日を迎えて、私たちはさらに思いを新たにして、真の平和と民主主義日本の「語り部」としての任務を果すべきではなかろうか。

（Y）

## 第11回例会（予告）

日時　十二月六日(土)午后一時半より
場所　中京区竹屋町河原町東入る
　京都市職員会館「かもがわ」
ゲスト　前参議院議員　河田賢治氏
テーマ　大正期の労働運動その他
参加費　一名　三〇〇円（茶菓費とも）

**京都の民主運動を語る会**

―第10回研究例会報告―

# 戦前の〝土曜日〟発行をめぐって

編集発行責任者　斉藤雷太郎氏

「語る会」第十回例会は十一月十五日午後二時より五時頃まで、京都市職員会館〝かもがわ〟で、ゲストに、戦前〝土曜日〟の編集発行の当事者斉藤雷太郎氏を迎え「同誌」発行をめぐる背景と苦労話を聴きました。出席者は婦人三名を含めて二〇名でした。

テーマは「新興キネマ大争議前後」と予告していたが、同氏は直接同争議にタッチしていないので詳しいことは知らないとのことで、標記のようにかえて話していただいた。約一時間の談話のあと、質疑に応えて、斉藤さんの生い立ち、横浜で生れ、東京、大阪、そして最後に京都に落ちつくまでの若い時代の苦労を重ね、雑草のようなしぶとさで生きぬき、〝土曜日〟と題する月二回の小新聞を発行し、当時の良識のある人たちに愛読され、驚異的な発行部数を出すに至るまでの、特に少年時代から権力や不正に対する憎しみ、反骨についてのお話は興趣深く、親近感をもてるものですが、ここでは割愛します。（小見出は編集部で）

## はじめに

昭和十二年七月七日、日中戦争開始（芦溝橋事件）前夜の国際、国内的な政治・経済・労働・民族関係の主な諸事項を取りあげてみると、同十年三月、日本共産党中央委員会は破壊され敗戦まで党の全国的統一活動は事実上中断。「赤旗」も以後停刊。同十年七月廿五日～八月廿日、コミンテルン第七回大会がモスクワで開催、反ファッショ人民戦線の方針決定。同十一年一月十六日スペイン人民戦線内乱開始。同年二月野坂・山本から「日本の共産主義者への手紙」。同年二月の皇道派青年将校による「二・二六事件」。同年十一月廿五日日独防共協定成立。――当時労農運動はもちろん、文化運動も、弾圧につぐ弾圧のなかで、京都では雑誌「リアル」が昭和九年七月に、「世界文化」が同十年二月に、「学生評論」が十一年五月に、そして「土曜日」は同十一年七月に続いて創刊され、そのほか、数多くの進歩的同人雑誌紙が刊行された。しかし、日中戦争開始前后の同十二年には殆ど全部のスタフは検挙、刊行物は廃刊させられました。

京都の生んだ革新的弁護士であり、「旧友クラブ」の会長でもあった故能勢克男氏は、「京都民報社」編、「近代京都の足跡」シリーズの紙上で、「土曜日」と斉藤雷太郎氏を評価して次のようにいっています。

『昭和十一年七月に創刊された「土曜日」は、タブロイド版の大衆啓蒙新聞として、隔週の土曜日毎に毎号一、〇〇〇ないし七、〇〇〇部発行されて人気を呼んだ。その編集、ならびに発行を一人で受持った斉藤雷太郎は、松竹下加茂撮影所の大部屋に所属し、仕事熱心な経営能力ある人だった。「世界文化」と同時に昭和十二年十一月七日廃刊させられた。』

本日の司会者山田幸次氏も、ゲストの紹介で次のようにいっています。

『昭和十一年から同十二年にかけて出された「土曜日」という週刊紙は、当時、労農運動は勿論、文化運動も全部弾圧しつくされたその中で、「土曜日」は颯爽（さっそう）と十一年七月登場、しかし残念ながら十二年の十一月に同人の皆さんが逮捕され、つぶされるというような歴史をもっています。

私達は当時まだ学生で、愛読者の一人でしたが、割合大きな版で、表紙の半面をたしか伊谷賢蔵さんの半頁つぶした見事な表紙絵がいつもでていて非常に私達も感激して読ましてもらったものです。

「土曜日」――この題字の意味については、昭和十一年五月『世界文化』五月号に新村猛氏が当時のフランスの週報「金曜日（バンドルデー）」を紹介した。その創刊号の巻頭言には『土曜日は人々が自分達の中に何が失われているかを想い出す午後であり、真面目な夢が瞼に描かれ、本当の智恵がお互いに語り合われ明日のスケジュールが計画される夕である。憚る所なき涙が涙ぐまれ、隔てなき微笑（ほほえみ）が微笑まるるところである』と述べられているように「土曜日」は内容形式ともに全く「金曜日」を模したもので、「金曜日」の標語には、共産主義者のアンドレ・ジイドから新トーマス主義の宗教的なジャック・マリタンまでを人民戦線の中に包摂し、いやしくも、ファシズムを嫌悪するものは同一戦線の上に立つべきである。と書かれている。

## 「京都スタジオ通信」の発刊

私は昭和五年頃、阪妻プロにおりまして、当時阪妻は剣劇俳優としては非常に人気がありました。その頃の影響をうけ、左翼がかったものをよく撮し、松竹と提携していましたが、あまり彼の作品は儲かるものは少なく、佐倉宗五郎を最後に松竹とは関係が切れました。阪妻は千葉方面でプロを始めました。千葉での第一作は阪本勝の「洛陽餓ゆ」でした。そして関東にゆくものと松竹に残るものとに別れ、私は松竹に残りました。

松竹はその頃、ナップの影響を受けた連中が相当おり、ロケなどに反撥して何となく抵抗していました。

新興キネマでは親睦会みたいなものをつくり、これが労組や、文化活動的な働きをしていました。

新興キネマ争議団の指導的スタフの一人、坂斉小一郎が後日『映画に生きる』という本を出して、そのなかに当時の争議の模様を詳しく書いています。

争議は敗北に終りましたが、その後しばらくして松竹下加茂に、楠田清、助監督、沖は俳優として入社してきた。

沖は入社早々活発に運動を始め、全協のアジ・ビラや赤旗なんかを私達にくれました。彼は借家人組合にも関係しており、当時私も不平組、ズボラ組で、従業員としてあまり歓待されない存在でした。彼の行動を頼もしく思い彼に追従していったわけです。

沖の住いの近くに借家人組合の事務所と称する机一個の空家があって、新興キネマ争議のとき東京から応援に派遣されてきた松尾清という男が常任としてそこで働いていました。

沖の家には坂斉や私もよく訪ねていったものです。

そのうち坂斉がやられ、沖は党の仕事をするようになったと姿を消した。

私は以前、全協の一般の組織に関係して、京都地区のキャップ坂斉氏や、有力メンバーの何人かと接触して、アジビラ作りや街頭連絡など手伝ったりして、非合法運動の一端を体験もし、非合法運動のむずかしさをいくらか知っていた。

どんな意志の固い人間でも限界があるし、自己犠牲の精神をいつまでも持続することは困難でもある。またそれを期待してはならないと思った。したがって、革命運動は非常に優れた人々によって出来る仕事で、その根幹となる人は、特に選ばれた誠実で有能な人物でなければならないと思った。一定の水準以上の能力と意志を持たない人間は、直接革命運動には参加さすべきでなく、犠牲ばかり多くて実効のあがらないやり方で、あたら善意と熱意を持った人々を、犬死させてはならないというのが、私の体験から得た見解でした。

私は非合法運動する程の強固な意志も能力も持たないので、自分の能力にあったやりかたで、自分の善意を生かそうと思った。

私は坂斉や沖を信頼し切っていたので彼らの意志をついで撮影所内で何か始めようと決心しました。

まず、若い者十人ばかりで手書きの原稿用紙に絵表紙をつけて綴じ、「サルタン・バッグ」と名をつけたパンフをつくり回覧しました。

会員も廿人以上にふくらみ、だんだん盛大になってきました。そこで、これにヒントを得て「京都スタジオ通信」という新聞発行の計画をしたわけです。

## 〝土曜日〟の発刊から廃刊まで

宣伝部から何がしかの金をとって広告など載せていたのですが、当時、内務省検閲の新聞は、時事問題が書けないので、時事問題を書こうとすれば五百円の保証金がいるのです。この保証金で月三回出すことができる。

何といっても時事問題の書ける新聞でなければ無意味だということで五百円の金をつくることに専念したわけです。そこで、スターの暑中見舞や謹賀新年の挨拶をもらったり、スターに色紙を書いてもらい、それをファンの連中に買ってもらうとか、いろいろ奔走して、九カ月で五百円の金ができたわけです。その金で国債を買い府庁の検閲課で手続を終え、これで保証金の方は解決しました。

次に原稿ですが、当時、京都でいろんな進歩的同人雑誌がでており、その各撮影所の宣伝部にいって、撮影所助監督、俳優、技術者、若い一般従業員の親睦と映画の研究を兼ねて、この新聞を出すことにしたから応援してくれといって廻りました。

その頃、古参の運動家であり「京華社」に勤務の武田昌夫、同盟通信の児島英之助の両氏を知っていろいろ発刊についての知恵を借りました。私は、小学校四年中退で、あまり文章も達者ではないのですが、自分は書かなくても皆なに書かせて、それをまとめて出版すればよいではないか。私は準備して約半年がかりで出すことができたので、二人は全く驚いていました。

同人達と親しくなって書いてもらうわけですが、なかなか原稿は集まりません。

私は新聞、雑誌の切抜きやらいろんなものを拾い集めて、いいかげんに紙面を埋めた苦労もしました。

もう少し実のあるものでないと一般の人々に売り込むわけにはゆきません。そこで、かねて「文芸春秋」の筆者紹介で、住谷悦治、大岩誠、林要の三先生をチェックしておいたわけです。

住谷、大岩両先生は丁度ドイツから帰ってこられたばかりらしいので、お願いしたところ期せずして、ドイツのニュース映画館のことを二人から書いていただきました。

住谷先生から次々に能勢克男、中井正一両先生へも連絡がつき、継続的な寄稿の快諾も取りつけることができて、いままで悩んでいた原稿問題は一ぺんに解決したわけです。

内容的にも、まあ、そこそこの、世間の人にみられても恥かしくないような形になったわけです。

新村出先生のご子息の猛先生からフランスの「金曜日（バンドルデー）」の運動が燎原の火のように拡がって大ぜいの支持者を得ている話が紹介されました。

その話を中心に討議がとりかわされ、結局、文芸欄、社会欄、婦人欄といったような欄を設けて、大ぜいの人達がそれぞれを分担してやろうではないかという話がだんだん具体化してきたわけです。

当時第一書房から「セルパン」という本が十銭で出ていました。それは、大体、海外の通信といったようなものがおもで、まあ海外の文化の紹介といいますか、そういった記事が殆んどでしたが、十銭という安さもあって私も続けて読んでいたし、若い人の間では相当読まれていたようです。

それで私としては「セルパン」の大衆化したようなものを目標にしていたわけですから、丁度そのバンドルデーの話がでたときに、そりゃ結構だということになって、話は急速にまとまりました。

そして、具体的に新村さんが文化欄、辻部政太郎さんが文芸欄、能勢さんが社会欄、中井さんが巻頭言といったようなことを話し合われて「京都スタジオ通信」を改題して「土曜日」とし、昭和十一年七月四日にそれが出たわけです。

（次頁につづく）

## 販売頒布の苦労について

ところが、宣伝も何もしないし、無記名で発行したから、あまり売れゆきはよくないのです。当時、学生の間に人気のあった林要さんを編集の表看板にして、原稿は無記名で、能勢さんは一般の人たちの原稿を集める。中井さんは世界文化関係の人達の原稿を担当する。私がタブロイド六頁の紙面確保に責任をもつ。編集は能勢、中井、私と合意で話し合ってきめる。

さて、新聞自体は、いまみてもらってもわかりますように、戦線型の情熱のあふれる、よいものだと私も思っていました。なかなか、金を出して買うという段になると、売れゆきはもう一つよくなかったわけです。これはまあ、馴染もなく、突然、本屋の店頭に宣伝もしないで出したのだから仕方のないことですけれど。二回も三回もあまりよい売れゆきではないのです。

これではいけないと思って「広告」を売れている店に二〇～三〇部無料進呈して、喫茶店なんかテーブルに置いてもらって、お客さんに読んでもらう。持って帰る人もあるので、無くなったら女店員さんにまた出してもらう。

ただなら自慢げに読みますし、読めば必らずついてくると私は思っていましたから、それを続けているうちに段々評判もお客の間にわかってきて、喫茶店の主人や、他の広告主の人達も、まあ、まんざら、頼りない新聞というわけではなし、実のある新聞だと理解されてきまして、折をみて、百部一円五十銭でサービス料に買ってくれと頼んだわけです。

その頃、喫茶店のコーヒー代は十五銭でした。安いところは十銭のところもあるし、五銭喫茶の大衆の店もあった。大体私のもらった「広告」の店は十五銭が多く、そこの主人は百部、一円五十銭で、或店では二百部買ってもらった店もあった。

その頃の印刷代は一千部、初め三十円だった。それが一寸調子づいて、もう二～三、〇〇〇部に増やすようになると、印刷屋の方は五円上げてくれということで、三十五円になった。それで一部刷代と紙代が七厘～八厘くらいが一銭になった。

ですから一銭の新聞を五厘もうけて一〇〇部を一円五十銭で買ってもらう。

それから出町に宮崎という本屋がありますが、そこが売りさばき所といいますか、各本屋の店に配ってくれ問屋の役をしてくれました。

それが、二銭で卸して、本屋が三銭で売って、だから一銭の儲けしかないわけです。アンパンが一つ二銭の頃です。それで本屋の店で、どんな調子かと、長時間ねばって佇んでみていますと、みる人はみるが、三銭の「土曜日」を買う人は少ないんです。それでも、まあまあ段々馴染ができたとみえて、買う人もあるし、それよりも、産組の全国的購買組織である大阪の全購連―このような組織の大きなところから五〇～一〇〇部の注文がくるようになりまして、その発送部数も相当のものになりました。

ところが、私自身にしたら、その仕事をやってゆく上で、どうも世情も険悪になって来ますし、個人もそうですし、まとめて三〇～五〇部と買う事態になると、いつかまた、当局が目をつけるようになるのではないか、ということを考えて、これはどこか、駅の近くの本屋に特約して、そこの本屋に買いにいってもらうようにしたら、わからんのとちがうかと考えたりしていました。

とも角、「土曜日」は軌道に乗って発行部数を四～五、〇〇〇部出すようになるし、多いときは七～八、〇〇〇部のときもあった。東京方面にも三～四〇〇部送っていました。

私が東京にいったときに、ついでに読者（読者といってもまとめて一円五十銭で買ってくれる）喫茶店を少しつくろうと思って、新宿の喫茶店を、何軒か歩いて五～六件獲得した。

金を送る段になると思うようにならず、これはまあ、仕方がないと思った。とも角、「土曜日」が読まれたらいいんだ、あの広告代で原価はとれているので、別に売れんでもよいわけです。

## 原稿料はただで

執筆者への原稿料はただです。要するに経費というのは印刷代だけなんです。で、それは広告代でまかなう。

週刊ということですけど、三回しか出せないわけです。（五百円の保証金だから）。これを毎週刊にするには保証金が千円要るのです。千円だと毎週出してもよい権利が得られるわけです。ですから週刊にもってゆこうとお金をいくらか貯めた。大体十二年の十一月に四百円貯ったところでつぶされた。

段々、世相が険悪になって来まして「土曜日」がこの状態で出せるかどうか話題に上ってきました。

話は前後しますが、十一年の終り頃「リアル」なんか検挙され、同志社文学・京都文学・車輪なども出なくなり、こんご「土曜日」はどうするのか話題になってきた。

それで、当りさわりのない随筆的なものとして永続するか、それともいさぎよくカットするか、等の話が関係者内で、でてくるようになりました。

ところが検閲をまあ十分注意して、いろいろの出版物を集めて、どの程度の限界があるのか、私なりに研究もした。この程度なら大丈夫ではないか、他の先生方も、そのような判断をもっていたらしく、大体、この程度なら発禁とか何とかの問題も起っていなかったことだから、まあまあいけるだろう。ですから一方では、もうそろそろ、やめなければという話もでているし、他方では週刊にするための金も集めていたという、おかしなことがやられておった。それで十二年の十一月に潰されたわけです。

## 教訓のかずかず

そのつぶされるまでは、一回も遅れて出したり、休んだりしたことはありません。チャンと決められた期日に出していました。それは先生方が確実に自分の受もった原稿を書いて、能勢さんとこに届ける。中井さんを通じて集めるとか、能勢さんは「世界文化」以

（次頁につづく）

# 「色川善助」さんの思い出

西村清三

「滝川事件」の闘争たけなわな一九三三年の五月末か六月初めのことでした。街頭連絡でプロキノの泉君から、竹村氏が会いたがっている、ときいてこれはよい機会だと思いました。うっかり竹村氏をわすれていたことに気がついたのです。あえば京大の内部について何かとおしえてもらえるはずです。そしてなつかしくもありました。地下にもぐっている身の再びあうこともないかもしれない。そんな気持ちもわくのでした。

竹村氏と初めてあったのは前々年の一月で、その後わたしは全協の運動にかかわるようになりましたし、消費組合のほうは彼の口添えでした。今年はさらに大きな活動の場が私のまえにひらけ、京都地方の共産党の再建で、多忙な毎日でした。そうした私の歩みの第一歩を導いてくれたのが竹村さんなのです。伝言は、寺町通り今出川上る東入る北側の「田村」宅で待つ。でした。

当時、われわれは人とあうときは、まづ街頭であって、安全をたしかめながら会合の場所へゆくのですが、相手は竹村＝色川善助さんだから、直接約束した日時に田村邸を訪れました。

ところが、二階へ通されて私は驚いた。色川さんは仰臥した病人ではありませんか。絶対安静の姿です。面会も許されないにきまっています。看護の白いエプロンの若い婦人がスプーンで食べものを病人の口へはこんでいる。色川さんは眼だけうごかして嬉しそうにむかえてくれました。

「どうだね、やっているらしいナ」

食事のちょっとした間にかれはぽつんと喋りました。

「京大のほうが忙しいです」

わたしは農学部の学生の動きについて質問したかったのですが、病人を刺激してはいけないと考えました。

種々の副食物がありましたが、いまも覚えているのは大豆に昆布や人参などを加えて柔かく煮たのをスプーンに山もり、口一ぱいにパクついた色川さんでした。彼はよく嚙みました。食事をたのしんでたべるなんてゆとりはないのです。病の進行と競争で、それに克つための咀嚼作業を顎がだるくなろうがどうしようが根気よくつづけることでした。実はわたしは朝から「めし」らしいものにありついていなかったのですが、それとこれとは正反対の現象ですけれども本質的には同じ生きぬくためのすさまじいものがあると思ったのです。

ゆっくり時間をかけた夕食がおわって、婦人が膳をもって階下へおりたとき、色川さんはこの機会を待っていたのでした。元気な動作で腕をのばすと、水枕の下の蒲団のしたから紙きれを一つ、と見えたのは二つに折った拾円紙幣でした。把みだして私の膝のうえにおいて「早くかくせ」です。掌をふりはらっている。絶対安静の病人が手や上半身を激動さす。これは直接生命にかかわる危険な労働です。そして彼は金銭とも競争しているにちがいないのです。私は感謝の意を心から表して、紙幣をもとへおかえしするのでしたが、

「僅かだが資金のたしだ……」

色川さんはそういってとりあわないし、本当は私の手許にはビラの紙代もなかったのです。喉から手がでるのです。私は組織の一員として有難くいただくことにしました。深く頭をさげておし頂いたものです。

×　×　×

それからまもなく六月二〇日にわたしはやられまして、色川さんは同じ年の八月に亡くなられたと、きかされた時はもう数年を経過しているのでした。

最後の連絡者泉（菅野）君もすでに故人でした。（一九八〇・一一・一〇）

## 事務局より

## 新春特別号を
## 年賀状代りに御活用を

多難なる一九八一年を迎えるに当り年頭の所感・決意・消息など、至急お送りください。そして「年賀名刺広告」も、共によろしくお願いします。

本号は、増ページで年内に発送しますから、年賀状代りにご活用下さい。

頒価は、用紙と印刷・送料の実費でお送りします。

年頭所感、年賀名刺広告、掲載誌の必要部数を、十二月十日必着で、御申込みをお願いします。（K）

（前頁より）

外の原稿を極力集めた。「土曜日」が一～二回出た後で有力な執筆者の原稿が一寸遅れるので発行日を遅らしてはどうかとの話が出たことがあった。

二～三日遅れたり、合併号など当然ありそうなことだが、私はやはり、決められた約束は守るべきだと主張した。それは他の執筆者は発行日を目標に原稿を書くし、映画館の広告も何日に上映ということ、商品のサービス・デーも何日ということを頭においている。守れぬ人は守れるようになってから参加してもらうようにいった。「土曜日」が期日を確実に守り、黒字でやれたのは、如何に参加者の熱意をもって皆がやったかということであった。

団体行動だから、見解の相違はもちろんあるが、喧嘩せず、約廿人近い人が関係しており、ボスをつくらないのがよかった。ボスをつくると、いくつかの派に分かれ、意見の対立が生れる。また、利権がないことも成功のもとだと思います。

誰がどんなことをやっているか、指導は誰がやっているのか、誰が貢献したか、内部の分担者も外には言わなかった。書かれているものが勝負だったということです。

## あとがき

質疑応答のとき、婦人の寄稿について質問がでていましたが、婦人服の経営者の堀内勝子さんがボーグ（流行）について十回位書いており、他に小学校の女教師、大丸の女店員、女医さん、能勢さんの妹さん、栗原佑さんの奥さんなどの寄稿がありました。（文責　井垣次光）

# 昭和初期・戦争前夜の日本(続)

## 第七回例会での質疑応答から

本誌第八号掲載の「昭和初期・戦争前夜の日本」のテーマで、岩井忠熊先生のお話しを聴いたあと、参会者との質疑応答に熱が入り、その内容豊かなものがありました。その中から……。

### 治安維持法について

――戦前の治安維持法は「私有財産否認」と「国体の変革」を対象にしてつくられたが、これを、単に「戦争反対・平和を守れ」といっても全面的に適用されました。どういう解釈からでしょうか。また「国体」の意義は？　国家なら学問的にも意味はハッキリとしているんですが。

**岩井**　私は法律が苦手で…法解釈はご勘弁ねがいます。国体の概念は天皇の国家統治の大権が中核だ、というのが当時の司法当局の説明です。治安維持法ができた時期は、どこの資本主義国でもほとんど同時に治安立法がありました。これはロシアで社会主義革命が成功し、コミンテルン（国際共産党）ができたので、外国からの指令をうけた政治団体の活動、また、暴力革命を禁止するという内容ですが、ロシア革命に対する資本主義国の反革命性がこの法律を作らせたと思います。その時点では日本の治安維持法も、国体の字句は入っていますが、内容は各資本主義国の治安立法と同じ程度のものではなかったかと思われる節があります。

治安維持法を審議した議会では、始めは、むやみやたらなものは作らないという主旨説明でしたが、一たん成立しますと、日本の天皇制ではそれでおさまらない。だんだん拡大解釈され、改悪されたということになります。

### 参謀本部の廃止について

――参謀本部をなくそうという空気があったとのお話ですが、その人や団体は

**岩井**　政治家の中では尾崎行雄、政治家ではないが福田徳三、弁護士で代議士の今井嘉幸などです。とくに吉野作造の二重政府論というのがありました。日本には内閣総理大臣によって代表される政府の外に天皇によって統率される陸海軍があって、その中心は参謀本部です。これが本来の政府の統制をうけずに、いろいろのことをやっています。だから二重政治を廃止せねば政治は正常化にならない。だから参謀本部を廃止せよというのが吉野の説です。

それに軍縮問題と重ねて廃止とか縮少とかいっています。どれだけ影響力をもったか解りませんが、軍人からみれば恐ろしい議論として深刻に受けとめざるを得なかったと思います。

当時、元老といわれた西園寺公望の考え方は、大体において英米を中心とする国際協調路線でしたが、自分は政友会の総裁でありながら、ライバルの民政党を信頼し、外交では原敬外交を信頼するといった人でした。

世代は違いますが、後年の近衛文麿はそれと反対で、彼は英米に支配されている国際状勢のなかで、日本は独自の地位を主張すべきであるとして「英米本位の平和を廃す」という論文を書いています。このように天皇の側近の宮廷派といわれる人たちの間でも意見が分裂していました。

そこら辺りから日本の支配層の意見も分裂したと考えられますが、近衛自体も一時陸軍に接近しようとしたが、余り近づくと危ぶないという日和見主義なところもありました。

### 大正デモクラシーについて

――明治が大正に代り、第一次世界戦争で、日本の青年や労働者が思想的に高まり、農民や部落民などと共に民主主義的運動に進んでいます。これは大正デモクラシーの特徴だと思いますが。

**岩井**　資料によって申上げると、米騒動までの日本は相当重苦しい空気に包まれていたが、米騒動を転機に、その経験から、日本でもやればやれるのだというような革新的な気運が生れ、いろいろの運動が盛んになってきます。

――大正時代における日本資本主義の発展を、国際的にどう位置づけられていたのでしょうか。

**岩井**　こういうことが指摘されます。当時の日本の資本主義は、英米に依存していた。資本主義が独占段階に発展すれば資本の輸出が当然なんですが、日本の資本輸出の多かったのは第一次大戦さなかに二年間だけで、後は全部借入の方が多く、その借入先は大体英米ですから、金融的には完全に英米に従属していました。そこで日本の財界・政界の主流は英米協調の考えでした。だからこそ、日本は早く自立せねばならないという考え方が出てきたと思います。

――当時の日本資本主義発展段階の問題で、講座派と労農派といわれる人たちの論争があったが、僕らにはそれを理解することができなかった。また「天皇制廃止」というだけで共産党や進歩的な文化人が弾圧をうけたが、広汎な大衆をどう組織するかについて論議すべき問題が多く残っていた。今日戦争反対の運動を進める上でも、大衆との結びつきについて、もっと論議がされるべきだと思いますが。

**岩井**　さて、研究課題がたくさんで、どこからお答えしていいのか（笑）…当時の権力側にもいろいろ内部矛盾や対立があって、とくに陸軍に対する海軍の反感は熾烈なものでした。二・二六事件のときにも、東京湾に軍艦を並べて、陸軍の反乱軍のいる方向へ砲口を向けて、何時でも闘える準備をし陸戦隊を上陸させて海軍省を護ったくらいです。終戦間際の作戦でも、海軍はいわゆる水際（みづぎわ）作戦で、米軍を上陸させず捕捉、殲滅する準備をしていたが陸軍は本土決戦で、敵を本土の奥地へ誘いこみ、縦深陣地戦術で

敵を幾重に囲みこもうとする作戦でした。この作戦の争いも結局八月十五日でも統一できなかった。こんなことでは戦争に勝てる筈がない。

フランスがドイツに占領された時の闘い方をみますと、非常に多方面な闘いをしています。最後にはパリーの警視庁の警官までが奮起しています。日本では警官が蜂起するという事はとても信じられませんが、そういった事をやらせるような運動が必要でないかと感じるのですが。

## 大政翼賛会について

――大政翼賛会ができた前後の事ですが、産業組合中央会の会長有馬頼寧が、翼賛会の事務局長になったとき、産組の農村青年連盟員は、有馬は何かやりそうだと、それに期待し各府県の青年連盟員も翼賛会に入った。ところが一年経って、平沼騏一郎が翼賛会の会長になって有馬を追い出した。そして青年連盟は翼賛壮年団との統合を強制されたので、各府県の青年連盟は挙って反対したが、警視庁に呼び出されて解散を命ぜられました。

**岩井**　当時は新体制を利用して軍のファッシズムに歯止めをかける国民組織をつくろうとしたんですが、かえって赤だということにされたんですね。

――日本では下からの革命が非常に困難だといわれ、上からの革新は官僚的になる。上と下とが手をつなぎあって大政翼賛会で何か新しい日本型の革新政府をつくるんだと盛んに云われていました。青年なんかにそういう宣伝が行われた。なかには、日本の国情からそういうことも可能だと考えていたものも少くなかった。

**岩井**　兵庫県の例ですが、中野正剛の東方会が、社会大衆党と組んで新しい国民組織をつくろうとしたんですが、それに参加した人が、どういうことをやったか、という研究があるんです。これを見ると、東方会の下部で動いている人に左翼運動の前歴者が多く、そのことが特高に危険視されたんですね。そうした特高の見方が東方会弾圧の理由だったのです。

――陶磁器労組の活動家が東方会の会合に何回か出席していたようです。

**岩井**　しかし、支部には中央からの統制は充分でなかったから、自主制の強い支部はある程度勝手な行動があったので、それを特高がにらんで検挙したという記録があります。あの頃の特高は何でもかんでも引かけて検挙したんですから。

## 日本の再軍備について

――話が変りますが、さいきん自民党が軍備の増強にやっきになっている。敗戦で潰滅した日本の資本主義が、アメリカの朝鮮戦争、ベトナム戦争中に高度な成長・発展を遂げたが、さいきんの危機を打開するために軍備増強、憲法改悪をやろうとしている。私たちは戦前の経験から、その危険なみちを阻止することが何よりも大切だと思います。

**岩井**　いまの自衛隊の火力は、戦前の日本軍隊より、はるかに強化されています。軍事力は強大ですが、一たん戦争に入るとその損害をすぐうめることは不可能といえます。予備自衛隊を動員してもその損耗を埋められません。今の憲法では徴兵はできませんから、青年に呼びかけて自衛隊入隊を積極的に勧誘するでしょう。今の青年の多くはそれに応じないでしょう。そこで憲法改悪ということになるのですが、それを強行するのは反動勢力にとって非常な賭となります。もし国民投票で負けたら大変ですから、そこんところに今危険な状勢の中で、また逆にその危険を押し返す有利な条件があります。

資本主義のある段階になると、戦争の危険性が絶えず造り出されるが、反対の勢力も又強くなっている。私らがその強い力というものが、過去の経験をどううけ止めるかによって、本当にその力を発揮することが出来るという点に、大きな関心を持つ必要があります。解放運動に永い経験をお持ちの皆さんの教訓を、科学的に理論化することが、私たちとして、常に心がけるべき点だと思っております。

## 戦前との相違

――私は、戦前と現在とは、同じでないと思います。戦前は日本資本主義の後進症がいろいろ問題を提起し、戦争へのみちをとらざるを得なかったが、戦後は、意識の水準も質的に理解度が変っています。戦前は天皇に対する絶対服従を教育され、天皇制に反対するものは国賊だといわれ、理屈なしに訓練されていたから。それと戦争とを結びつけてもよいが、戦後の資本主義のなかで、意識の面から云えば日本人の意識は戦前とかなりちがうのではないかと思います。

**岩井**　資本家だけでなしに、支配層全般がうけとる教訓みたいなものがいくつかあると思います。彼らにとっては、二十世紀になってからは、戦争の結果として起きたのはロシア革命であり、第二次世界大戦後の社会主義国の出現であり、民族解放運動の高揚であった。新しい戦争をやるたびに、必らず支配層の後退です。これは支配層としても大きな教訓です。だから全面戦争はとても出来ません。ベトナム戦争で米国が敗けたことは、彼らとしても正面に出てやることは不得策であることはかなり身にしみて知っているでしょう。だから自分は正面に出ないで、社会主義、又は民族運動の中に分裂をつくりお互いに闘わせて、その中で自分の利益を追求していこうとする、新しい戦争政策みたいなものが出てくる可能性があります。彼らはそれを推進する上で、彼ら自身が強大な武力を持ちながら援助し、相互に闘わせるという方向へ進んでいます。勿論、ひとつ間違えばボタン一つで核戦争となり、大量の殺しあいになり自滅することになりますから、アメリカとしては、日本などを手先に使って局部的な戦争をやらせる可能性があるのではないか、と私は思います。

＊　＊　＊

（次頁につづく）

# 戦争前夜の日本

――満州事変が始って以来、政府は非拡大方針で行こうとしたが、軍部はおかまいなしに勝手なことをしていたのですね。

**岩井**　その意味で、今の自衛隊が内閣の知らないことを勝手にやっているということは、自衛隊がむかしの軍部みたいになって行く道筋みたいなものでありませんが、断片的に出ています。

満州事変以前からすでに参謀本部の判断というものは、満州で行動を起さなければいけない情勢になっている。その時国内がそれを遂行する体制になっていないから、同時に国内の政治的な革新を実行しなければならない、ということを、ちゃんと書類に作ってあるのです。ですから、満州事変は偶然に起ったものでなく、謀略的計画的なものの一端であったといえます。

国家の他の部門まで、その判断が及んでいたかどうか疑問ですが、兎に角軍が引っぱってゆくのです。引っぱってゆかれた側からいうと、軍の一部の計画なんて大したことでないと思っていると、いつの間にか大事件にまでなってしまったのですが、火附けをした連中からいうと、それは緻密に計画した予定の行動だったわけです。

## 近衛内閣と軍部の圧力

――当時の満鉄調査部の理論家たちの中国の調査分析や、アメリカのヴィットフォーゲルなんかの分析は、ほとんどマルクス主義的な分析だったから近衛としては情勢が解らないと思うんですが。

**岩井**　こういう事があります。蘆溝橋事件が起った時は、第一次近衛内閣だったが、近衛は優柔不断な人間ですが、とに角事件を拡大したくなかった。参謀本部もはじめは非拡大路線でしたが、石原完爾が作戦部長で、彼は対ソ戦のための戦備を蓄積してきたのに、中国との戦争のために消費しては、対ソ戦はできない。だから事変は早く押えたかった。ところが、陸軍の中で、この機会に中国に一撃を加えようという意見があり、小磯国昭（朝鮮軍司令官）が上申書を出してきた。それが参謀本部の若手に支持されたので、石原作戦部長の統制がきかなくなり、日本本土陸軍の北支派遣が決まった。そのとき近衛は蔣介石と妥協しようとして、自分の特使を中国へ派遣しようとしたが、その特使が神戸から乗船するところを憲兵に逮捕されました。首相の特使を憲兵が逮捕したことは、首相の権限も軍部の圧力に抗し得なかったということです。

初期の近衛内閣の閣議の模様が今解るのですが、日中戦争が始って、当然外交並びに財政の責任上、陸軍の行動予定が判らねばならぬのですが、しかし、陸軍大臣は全然しゃべらない。中国における軍の作戦行動は統帥事項で参謀本部や大本営のやることで、閣議の問題にすべきことでない、という考えです。これでは外交・財政のやりようがないので、拓務大臣の大谷尊由、この人は、なかなか勇気のある人で、閣議の席で、いったい陸軍の作戦予定はどうなのかと質問したが、陸軍大臣は「これは軍事機密だ」といって答えなかった。それで見かねた海軍大臣が「軍の予定はこれこれだ」と横から答えた。すると陸軍大臣が顔をまっ赤にして「こんな席で何ということを云うか」とドナッタということです。当時の総理大臣といえども、軍事情報すら伝えてもらえない存在であった。

## 軍の独り歩きは許せない

だから近衛がいくら頭がよくても、別に独自の情報網を持っていたとしても、いったん戦争が始ったら、陸海軍からの情報を持たない総理大臣では、戦局に相応した対策がたてられないことになる。自分の周辺にブレーンみたいなものがいても何もできなかったのではないかと思います。

なお、満鉄調査部の仕事は、(1)日本がシベリアを占領した場合の統治機構 (2)兵用地誌、ソビエートと戦争する時のその地方の地図、を造くっていた。それが主な任務であったので、ソ連に関する資料・新聞・文献などの収集をやっていたのです。だから調査部の人で個人的にこの資料を見て、これは大変だと、反戦運動に利用した人もあったと思います。

また、「中国の交戦力の調査」という尨大な満鉄調査部の報告資料が陸軍の依頼でつくられた。その調査の結果は日中戦争は終局的に日本は勝てないというものでしたが、その調査の結論を陸軍は受け入れなかった。どんな結論が出ても今さら中国進攻は止められない。それだけ日本の国家体制は支離滅裂であったのです。

また、海軍大将の山本五十六は、この戦争で二、三回海戦をやれば、あとの補給が続かないとはっきり云っていながら戦争をつづけています。

当時の国会も自由な発言ができず、翼賛議会であって、政府も、議会も各個バラバラで、結局指導権を握っているのは極端な冒険主義の陸軍グループだったんです。

憲法があっても、政府の方針がどうであろうと、軍が独り歩きし出したら大変なことになります。このことは昔も今も同じことです。

## これからの見通しについて

**岩井**　私の知人のYさんのご意見は「日本の古い社会構造は戦後の高度成長政策ですっかり変った。天皇制イデオロギーも、それを支える社会的基礎がなくなった。最も危険なのはアメリカ流の近代主義、マイホーム意識で、当らずさわらずの人間をつくって、国民の意識を分解させていくことだ」という説です。

私は、今は、天皇制イデオロギーの復活の方が差迫って危険ではないかと思うのです。天皇制イデオロギーと闘うだけでは駄目ということは解るが、どちらが支配の主流なのか、Yさんの説は楽観的ではないかと思うんです。

――私らの年輩は教育勅語で天皇制の教育をうけているからY氏の説に反発するが、今の若い連中はどうだろうか、それよりも、もっと国民の要求にピッタリする運動が必要ではないか。

それから、憲法の問題ですが、アメ

（次頁につづく）

ソ連見聞記 (2)

# ソヴィエットの労働力

岡谷元治

ソヴィエットはその経済力・軍事力ともアメリカと竝ぶ超大国である。その人口もまた殆んど同じ位の二億四千万で日本の約二倍であるが国土の広さはアメリカが日本の二五倍であるのに対しソヴィエットは六〇倍であるから人口密度は稀薄であると言わねばならない。

侵略者日本でも戦争で多くの犠牲者を出したが侵略を受けたソヴィエットでは二千万人以上の人命を失ったので、終戦時には五百万人以上の労働人口が不足していたと言う。

さらに日本ではベビーブームを記録した一九五〇年にソヴィエットの出生数は、十年前に較べて一二〇万の減少であった。それから三〇年を経て今日若い労働者の不足はいちじるしい。

○

ソヴィエットの経済力は戦後着実に成長し、新しい生産設備がつぎつぎに整備された。その額は六一年から六五年にかけて二千億ルーブル、六六年から七〇年にかけて二千八百億ルーブルに達している。

増大する労働力需要の供給源は農村である。大型機械で省力化された農村労働力が全国的訓練システムを通して工場に流れる。その数は年間二百万人と計算されている。

だがシベリヤや極東の開発計画が発展するに従って基本建設の諸計画はますます多くの労働力を需要し、労働力の不足はますます顕著になってくる。

○

企業はなるべく少数の労働者で計画課題を達成しようとして生産の近代化・機械化・従業員の能率増進に努力しているが、今日では必要労働力を完全に充足している企業は少いので、新しい企業計画では労働資源の手直しが計られている。それでも労働力不足がシワ寄せされているサービス部門の人手不足は著るしく、これが外国からの旅行者にサービスの悪さを印象づけている。

今後の経済成長に具えて労働者数を増加させないでも生産性の向上によってカバーし、労働力需給の最適比率を確保しようとしているが、これは容易ならぬ事のようだ。

ゴスプランの議長バイコフの説明によると、本年度に予定されている生産高は一応労働力の裏付けを持っているものの労働人口の増加率は減少傾向にある点は否定出来ない由である。

（つづく）

# 亀井重一さんをおくる

井上甚太郎

北牧さんから「何故亀井さんの死を知らせてくれなかったか」と電話があった。そして一文を書いてくれといわれました。

富士原病院からCTの断層写真の説明を聞いてガクッとしました。民医連綾部診療所の新館建築の中心的役割を果して、竣工式を待ち、一号患者として十一月十日入院、同十九日午後十一時五五分、七八才、静かな永眠でした。生涯を人民と革命のために生きぬいた亀井さんらしい最後だったと思います。

広島県佐伯郡鹿川町三二八七ノ一四で、父亀井重郎さん、母いとさんの次男として生れ、長兄重一さん、姉ミサノさん、弟進さん。一家は重二さんの幼ない頃舞鶴町松陰町に移住し、父重郎さんの土木建築家としての安定した生活の中で成長されたのであります。

子供の頃から正義感の強い性格で、がき大将でもあり、故佐谷舞鶴市長とも同級生で良きライバルでもあり、生涯の仲間でもありました。

昨年冬、亀井さんの奥さんの要請で、「主人の経歴がさっぱりわかりません。いまのうちに是非聞いてやってほしい」といわれ私は二日間、宅におぢゃまして聞き書きをしました。そのとき、はじめて広島県が故郷だと云うことを知りました。国領伍一郎さんのすすめで大正十二年に日本共産党に入党されたこともききました。

二人で河上肇先生、国領伍一郎先生の墓にお参りしたとき、やわらかい日ざしを浴びながら石段に腰かけて、党の歴史や想い出話をきいたものでした。亀井さんの想い出話は、必ずといっていい程、新しい闘いの道すじが語られていました。

福井県芦原事件のこと、奥さん「みさを」さんとの結婚の話、綾部土木工営所での仕事のこと（昭和十年頃）、滋賀県での活動の経験、蜷川府政・羽室市政についての意見、共産党の先ばいの皆さんの話など教えられることばかりでした。

一言で云えば、原則的で権力に対しては徹底して闘い、大衆に対しては細心で優しい人だったと思います。

亀井さんの生涯の記録を綴りまとめることは、私たちの大切な仕事だと思います。多くの皆さんのお力ぞえで是非成功できますことをお願いいたします。闘いの道すじを補完するためにも——。

——綾部市八雲町——
（綾部市会議員・全日農京都府連顧問）

（前頁より）

リカの押つけだというが、あの中に盛られている平和と民主・人権の尊重はたびたびの戦争、とくに第二次大戦のあと、本当に戦争はやってはいけないとの日本国民の願いをこめて出来上ったもので、決して他から押つけられたものでないことをもっと力強く主張すべきです。

以上

随想 (4)

# ロンドンとベルリンで

住谷悦治

世界の有名な古都ロンドン！　その名を聞いただけでも、当時のわたくしは感激で胸のときめきを覚えた。一応このはしがきなくしては、わたくしのロンドン生活四ケ月の思い出を語ることはできないのであるが、ロンドンには何日、何か月、いや何年滞留してもおそらく飽くことのない歴史の奥深い大古都市であるといえよう。

わたくしはロンドンに到着してから久米氏邸の一室を与えられ、翌日からロンドンの大体の歴史と、見物先きの主要な場所について久米氏から説明をうけた。もちろん、一時間や二時間で語りつくせる説明ではないが、わたくしはベデカを唯一の旅の道案内として船中の四十一日間、船旅の友として読んでいた。わたくしにとっては大変なロンドンである。見学の重荷にひしがれたかっこうであるが、好奇心、知識欲にあふれていた当時のわたくしは、何でも彼でも、世界的な案内書「ベデカ」以上の、現実のロンドンの姿を、久米夫妻から聴かされ、まさにこれは圧倒的な目前の現実である世界の大ロンドンである。

○

むかし、夏目漱石がロンドンで、圧倒されて神経衰弱的な容態になり、友人が故国へ連れ戻そうかと相談し合ったという逸話があるが、ロンドンという古都はそれだけの古い歴史的な重さと広さと物すごさがある古都だ、とつくづく思った。まじめに考えすぎると神経衰弱症に陥るのは、単なる途上のバカ話ではない。ロンドンの歴史的重圧がひしひしと身に迫り、下宿にちっとして居たたまらぬ或る種の精神的な深みに脅かされるところであろうと思う。

わたくしは大ロンドンを相手にせず特殊な見学目標に従った。杉村楚人冠や夏目漱石、渋川玄成や、エトセトラエトセトラに圧倒されることもなく、特有な目標を立てて、見学に冷静を保つことにした。

ロンドンでは郊外のハイゲートにマルクスの墓を中心に訪れたこと、あたりのヒース花咲く丘はついでの見学であった。

○

ベルリンではカールとローザの殺された街あたりを探ってみたこと、などまた多くの社会主義者の合同墓地デンクマールを心措きなく眺め、スパルタカス・ブンドの内戦の跡を味うたことなどが興味ある見学であった。もちろんマルクスやベーベルの住んだという街と、それらの家並み、伝記・文献に出てくる古跡をできるだけ多く訪れることができたのであった。偶然中の偶然にも、それが昭和九年の終り、十年のはじめ頃で、ベルリンにおける社会主義者の有名なデンクマール（記念塔）が、ナチス・エス・アーの手先き、反動労働者によって、ガチン・ガチンと槌や斧でとり崩される現場を、やや近くから、まじまじと眺めることができたという偶然な光景をも実見した日本人のただ一人であった。真に千載に一度、一介の東洋の旅人であるわたくしが、ただ一人目撃することができたのであった。これについては、特に当時わたくしの「ヨーロッパ通信」として「京都新聞」紙上に「取り崩されたカールとローザの墓」という見出しで、詳しく書いた覚えがあり、戦後わたくしの「文集」の『同志社の一偶から』にも再録されているところである。

（拙著「法律文化社」から一九六七年九月一〇日発行）　取り崩されたカールとローザたちの墓」（二一四頁参照）

（元同志社総長）

---

# 木戸屋敷と談山神社

京都　渡辺　美登

この間は失礼いたしました。「かもがわ」はなつかしいところです。私の友人があの木戸屋敷に住んでいたり、府二女（府立第二女学校）の校舎が土手町の丸太町にあったりして、その頃からの銀杏は黄色くなっていました。

昨日談山神社（大和桜井）へいって来ました（お寺の集まりで）。紅葉がきれいでした。けまりをやりながら時の政府を引くり返すことができた時代を羨ましく思います。

さて新年号の賀状のことのせおいて下さい。料金はそのうち持参いたしますが、雀草師に俳画を教えてもらっていますので、下手な俳画の賀状を出しますから、いただくなら五部か十部で結構です。よろしく。

（伏見区淀大下津町一一七）

---

# 自宅で療養中

伊東剣之丞

「燎原」お送り下さいまして有難うございます。私は十数年前から公害病にかかり、健康を害し病院通いの毎日です。去る本年七月から三ケ月程病状悪化で入院しておりました。ようやく本月はじめ頃退院して目下自宅療養中です。こんな体で少しも思う様に運動もできず、まことに皆さんに済まぬと思っております。

来年は又来年はと思っている間に、年の方は用捨なくすぎて、早や八十路の坂を昇りはじめました。また来年の八十一年には病気を克服して、元気な体になって、今や憲法を改悪して軍備を拡大し、戦争の準備を進めつつあるインチキ政党を打ち倒し、真の革新政党拡大のために闘いたいと思っています。それまでは生き永らえて、この目でしっかりと見たいと思っています。

（吹田市内本町一丁目八―五）

* * * * *